

塩尻 4 (卷七十二、卷百) 天野信景

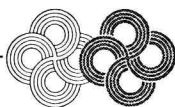
16

日本随筆大成

第三期

吉川弘文館

日本随筆大成 第三期 第十卷
昭和五年十二月卅日発行
編纂者 日本随筆大成編輯部
代表 早川純三郎
発行者 桜井庄吉
発行所 日本随筆大成刊行会



日本随筆大成

〈第三期〉16

昭和五十二年十一月三十日 印刷
昭和五十二年十二月十日 発行

編者 日本随筆大成編輯部

発行者 吉川圭三

発行所 株式会社 吉川弘文館

〒113 東京都文京区本郷七丁目二番八号
電話 東京八一三一九一五(代表)
振替口座 東京〇一二四四番

製作 株式会社 たんちょう社

目次

塩

尻（卷之七十二、卷之百）

.....

1

(解題 北川博邦 小出昌洋)

志海一里

目 次

卷之七十二 享保

念仏堂の待舟上人	三	諸秤千木等の令	三
瑞峰沙弥一周忌	三	東武忍岡養玉院	三
泰廟廿三回の御忌辰	三	無相院大僧都亮長の話	三
辛丑正月火化せし僧	四	辛丑伝教九百回	三
我国火定三昧	四	泰廟かくれさせましませし後	三
清僧道本和尚	四	名所の秋の歌	四
家の称号を名字と呼	四	六そぢの秋の記	四
山城国綺田村	四	寺の訓	四
同国祝園柞の森	四	江文明神	四
真如堂二万日不退転念仏	四	孝徳帝の詔	四
多武峯定恵和尚	四	延喜式金銀箔泥	四
足ある蛇	四	毬杖	四
熊野権現出現年月	四	物を盗て我寺に寄附せし話	四
吹上御殿にて訟を聞召事	四	虐の訓	四
菖蒲かぶと	四	称号を諸家に賜はる始	四

瓔珞

摩斯吒

濃州高須南八幡社内異竹

神社の鳥居むかしは

くれなる

雙

誤写二字と見ゆる字

詩作に第三字第五字

或僧書翰を元贄に見す

東鑑に云十字

八朔風俗

斎藤別当が石塔

土佐家絵所の祖

和画の大物

雷にうたれしものを療せし事

卷之七十三 享保

年号改元の式戦国

今時六位の袍色

四

梵燈庵の名句

四

初穂

四

三州水戸山にて掘出せし鐘

五

令曰先奸後娶

五

宇野六郎が子熊王丸

五

野間内海大御堂寺長円法師

五

萩生氏がおのころ鳥の説

五

和訓は王仁より始

五

尾北玉井村掘出せし井筒

五

長柄の橋柱

四

敦盛の室

四

俗にいふ真徳丸

四

寛正五年勸進能の図

四

成信重家出家の事

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

三

三

六論衍義板行

吉野皇裔二宮旧跡

大坂九昌院の上月記 白綾邑の故事 聖天

の岩屋

津輕今別の玉石金朱

史魚尸諫

孔子三戒三畏

人湿に寝る時は

辛丑伝教大師九百回忌

我国漏刻を置

丹州天の橋立の図

卷之七十四 享保

詩云王于出征

蹄涔付君子小人

心路正くして迷はず

鯤

燕坐、坐禪

頭髮のふけ

信州松本領地藏の像

渡唐天神拝時の歌

勢州孤野山湯本の図并記

あまこといふ魚の図

徐神翁が直言

一行阿闍梨が言

世人毎に饌食に於る

神道の新説

程子の学者

張弘靖が言

磁毛石

天台宮門跡始仁和寺門跡の称

男色

在京大番

壬寅浅間山焼

壬寅東国洪濤暴風

七

六

六

五

五

五

六

六

七

七

六

六

六

六

六

三

仏像の汗	三	坂東川塘の修築	六
皇子御降誕	三	摂州大坂の薬店に	六
盗賊のぬすみ物	三	癸卯歳旦	六
仏成道同法と共に	三	穂積鈴老人九十の賀歌	六
秀頼に殉死せし小童	三	福寿草の句	六
此より以下十 条古記抜書		人々の春のうた	六
森蘭丸	三	或人柴の庵を尋て	六
酒井金三郎	三	若菜の歌	六
景勝御征伐起元	四	亡子十三回の忌辰に読し歌	六
三駿三勘両兵	五	称名院の実誉	六
秀吉頼朝の像に言れし事	五	鳥井某が二七日香を薦偈	六
塙団右衛門事跡	六	金岡が絵、道風が書	六
可児才蔵	六	我国昔封戸の数	六
松井佐渡守	七	除夜撃レ鼓駟ニ疫癘鬼一	六
木村常陸介	七	己が栖替移り来りしも	六
東都施薬院新建	八	吉水大師行状を読し時の歌	六
順智法師追悼の歌	八	城南光明蓮社	六
源氏物語の詞にて読し歌	八	康熙帝崩新帝即位	六
神祖降誕四度甲子御賀	八		六

卷之七十五 享保

社稷を變置する事	一五	幻院師の庵にまかりし事	一五
人麿一千年神号贈位	一五	うき事しげき時のうた	一六
柿本明神法楽の歌	一六	赤善院大童子	一六
柿本社の号	一七	太神宮の司対面	一六
世人神を敬し仏を崇む	一七	園神	一七
兼香公内大臣辞表の事	一七	まよひ神	一七
当宦公卿	一七	春は曙の歌	一七
暮春述懷等の歌	一八	明石の略図	一七
人の方へ申贈りし歌	一八	享保年御猪狩の事	一八
夕早苗の歌	一八	似雲法師のうた	一八
順智法師百ヶ日の宿忌	一九	仏元上人写信録	一九
京師いかのぼりの禁	二〇	太神宮修造材木を採事	一九
安八郡春近村の老狐の事并筆跡うつし	二〇	清寥院殿三回の御忌日	二〇
魔の字	二〇	独対燈	二〇
癸卯三月二日	二〇	端午迄時鳥鳴ざりし時の歌	二〇
人麿神階宣命写	二〇	熱田浦に遊びし吟	二〇
炬範上人退院	二〇	衆生苦み重ければ厭心を生ず	二〇

遠山の翠近山の青

朱一貴

二五

石清水の祭の細男

七夕立秋二河白道の詩

二五

桐大蔵

四十八昼夜不退転念仏

二五

佐渡国三郡并金掘

立節句節にあたる事

二五

卷之七十六 享保

信玄諸州城主の所為を聞

甲辰五月岩城領熇暑

二三

歳徳の吉方

紅夷人の謡曲並国字

二三

おか玉の木

諸社俗体の神形

二四

元服の時の泔坏

秀吉聚楽落慶の時のうた

二四

寛平帝御出家

羽柴と名字せられし俗説

二五

六十六部の順礼所

康頼卒都婆流しの歌

二五

和俗懷妊の女の腹帯

九条植通公紹巴が句評并由巴が悦の記の

二六

慈妙上人

ことば

二六

尾北継鹿尾の縁起

聚楽和歌会雨中時鳥の歌

二六

瀬戸物山

尾州国府宮の追儼

二七

我朝仏工の祖並乞食部類 盲者

琉球人古墳吊文

二七

山から四十からといふ鳥

西域記曰印土

二七

山崎宗鑑

布袋

二七

陳元賛夕中秋雨の詩

備前中納言

高野山仏法僧

支院

ハミ厂ハ广イ欠

卷之七十七 享保

土岐氏光が歌

紅夷より猷ぜしヅウフル

蟠螂蛇とのあらそひ

辛丑東国松多く枯る

酒は就也

利を好の害を知て

熱田社参詣人の狂気

伊勢大神宮の御事は

永禄十三年の客星

壬寅暴風洪濤の記

葦垣の間に生じて

乱後の世主

三六 目礼

三六 南朝紹運図

三六 陳万年が子成

三六 本多助芳主御増附

三六

一七 関東諸家より猷燈籠

一七 熱田正覚寺縁起

一七 風炉子

一七 こそはゆしといふ字

一七 蓮花漏

一七 城は盛といふ言

一七 信幡

一八 宮人騎馬者羈羅

一八 南唐近事に奇怪なる事

一八 天宝遺事云長安の士女

一八 小児市瓜

一八 西使記云仏国

一三

一三

一三

一三

一三

一四

一四

一四

一四

一四

一四

一四

一四

一四

一四

一四

一四

桂海蜜志に云蜚

一手の盛を溢と云

西同書に云家国の理乱

浅ましげなる法師の物乞

法皇浄土法門御製

正親町一位家筈のうた

さいつ頃にか有けん志水法師

粘うる家へ来りし男の話

卷之七十八 享保

落祭風

以レ手為レ口

舐ニ樊噲之盾一

中世武家采地分錢の法

後水尾院御硯の御記

鎌

登、登

和漢厄年の説

藤瀬使府記

一四 決定往生問題

一四 浣鶏上人往生の事

一四 尾州土田村百五十貫

一四 牛耳無レ竅

一五 兎糸無レ根而生

一五 瀏

一五 白氏文集

一五 土輪

一五 俗にいふ白子

一五 渡辺綱両系の事

一五 周必大二老詩話

一五 転注之器

一五 鳥雛卵を脱すると餅を啄

一五 居敬窮理

一五 永楽錢の興廢

一五 天文以前東国武士の風俗

一五 京師工人某が子の奇疾

一五

一五

一五

一五

一五

一五

一五

一五

一五

一五

一五

一五

一五

一五

一五

一六〇

一六一

土佐の津へ漂流せし蜜船
なまぐさしといふ字

晋に饌食を

張文元が絵

開元通宝錢

結納

正訛集に云

不律なる寺院の大黒

阿蘭陀国の名

ヒジリといふ言

ふしはかせ

日本の学始

僧和

居停主人

穎利

熱田八劔宮造替

清涼殿の前庭青竹を焼

往昔民の貢する所は

論語為政

一六 文命堤碑文

一六 孟子万章下

一六 久布目又右衛門

一六 猿の狂言は見ぬからおかし

一六 東西風氣不同、愁喜異也

一六 重陽菊未開

一六 十月殿下二条綱平公御辞表

一六 隋唐の書借音字多し

一六 女借子志水法師が歌

一六 位袍はさら也五衣など

一六 仲冬二十七日雪降

一六 述懐のうた

一六 年暮はてゝ貫首

一六 老去て看る事を怕る

一六 元日子日なりければ

一六 界如院僧正の韻を和す

一六 潜斎老人人日ノ口吟

一六 法藏忠律師歳首垂示ニ云

一六 牽牛織女二星の事

一六

一六

一六

一六

一六

一六

一六

一六

一六

一六

一六

一六

一六

一六

一六

一六

一六

一六

一六

天漢

一七

梅雨

一七

二星の河会我國の故也と云説

一七

以西巴爾亞國の人來りし事

一七

卷之七十九 享保

倭奴國の訓

一七

神無月になりぬ散積し

一七

東都小伝馬町天火

一七

母の植置し橘

一八

或人調合せし奇藥

一七

維摩院僧正のうた并返し

一八

法宝大法師書紳云

一七

肥前平戸辺旱洪水

一八

邪解奸曲の語を説て

一七

厭苦縁の意を讀しうた

一八

世に習俗時勢あり

一七

阿弥陀仏誦法

一八

堂上地下の補略

一七

三州大浜の者流罪

一八

朝鮮使來亥秋來朝

一七

智鋒僧正退院の事

一八

水想觀にひきしうた

一七

光雲院殿御辭世のうた

一八

三夕の外秋夕の哀なる歌

一七

勢陽の雲鶴師

一八

続後選雜歌

一七

六如が詩并和

一八

十三夜雲立おほひて

一七

乙巳冬至

一八

曉鹿のうた

一七

冬至適遇三弥陀降誕日一

一八

真性院上人のうた并返し

一七

信、不疑

一八

九月尽のうた

一七

三部經合讃

一八

清板白骨観

修学の離宮御幸の時御製

法皇、禁裡御幸御遊

武具を隠し朝鮮へ渡せし事

雪の面白く降しあした

卷之八十 享保

内匠式に膳櫃

左右の二字の訓

丁酉將軍御代始の式目

荻野知秋翁

活軒世態を述し一章

門内の玄関

造像

浴像経の香水

勿論

倩 就 寂

樂家五調子

をや野のうるり

一四 霜月廿日の会

一四 尊珠院の大師講

一五 仲冬十一日京師迅雷

一五 小君御百ヶ日の程

一七

一五 閨月翁

一五 武城大營

一五 瑞竜公若宮へ御参詣

一五 沢菴和尚の歌

一五 將軍義昭本国寺に在し時

一五 秀吉もじの関にての歌

一五 和歌の古き称呼

一五 かゝし

一五 清少納言が石牌

一五 堂上諸家五撰家に属

一五 尾府奉仕の生駒家

一五 観音廿八部衆の名

一八

一八

一八

一八

一五

一五

一五

一五

一五

一五

一五

一五

一五

一五

一五

一五